近くの山の木で家をつくる運動
緑の列島ネットワーク

緑の列島ネットワークニューズレター vol.12
Apr. 2006

今号のトピックス page

■ 理事長からのご挨拶 1
■ 特集「全国木偏のＮＧＯ/ＮＰＯサミット2006in東京」 2・3
■ 活動報告①「西川林業地を訪ねて」 4・5
■ 活動報告②「讃岐舎倶楽部の活動紹介」 6
■ 活動報告③「学会での発表」 6
■ お知らせ 7
■ 事務局からのお知らせ 8

理事長からのご挨拶

本年度も半期を終え、本格的な春を迎える季節になりました。昨年は、年末より全国的な大雪に見舞われ、山間地で大雪の被害にあわれました方々にはお見舞い申し上げます。地球規模での気象変化が著しいなか、二酸化炭素等による地球温暖化からの影響を目の当たりに経験させられる昨今は、危機的状況と認識せざるを得ません。

当ネットワークは、日本各地の有志会員の地域活動をベースの草の根運動によって支えられております。それは、人と人の地域の繋がりを重視し、地域の自然を愛するという同じ理念（魂）を持って行動する人たちの心が大きなエネルギーを生み出していると思います。仏教にも人々の繋がり（縁）を大網のごとく、その接点は露のように光ると称せられるように、まさにネットワークが深層心理で繋がっていると表現しているそうです。

今年度に入り、新しい「地域グループ」も少しずつ増える傾向にあり、近山運動が広がりを見せております。その最小単位のネットワークからより大きなネットワークへと繋がるように、同じような理念を持ち目指す方向が近い他のNPO団体との相互ネットワーク事業を共同で開催したり、情報共有することにより、ますます近山運動が拡充されることを推進していきたいと思います。

会員個人、地域グループが近くの山の流域での活動を実践できるサポートと情報発信として、当ネットワークへの情報提供をお願いするとともに、地域グループが近くの山で、活動する植林、間伐事業資金補助としての森林基金の活用を具体的に事業として推進したいと考えますので、事務局へご連絡ください。

会員の皆様から、当ネットワークの活動が見えないとのご指摘もありますが、この近山運動を推進していくためには、実際の現場での活動が基本と考えます。是非共、この美しい日本の国土および地球環境を維持し、子孫に継承するためのひとつの行動として、近山運動を推進していきましょう。

今後とも事務局へのご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

特定非営利活動法人　緑の列島ネットワーク
理事長　大江　忍

第2回　全国木偏のＮＧＯ/ＮＰＯサミット2006 in東京

3月4日（土）、東京・新宿で第2回全国木偏（きへん）のNGO/NPOサミットが開かれました。このサミットでは、「木」に関して活動するグループが情報を共有し、連携することの意義が確認されました。
緑の列島ネットワークからは、副代表理事の加藤長光氏と、編集主幹の江鳩景子が参加し、様々な団体との情報交換を行いました。

サミットの様子

《木偏のサミットの目的》

全国には、「木」をテーマとしたＮＧＯやＮＰＯがたくさんあります。それぞれの団体の目的は、異なっていても最終的な目標は、“日本の林業の活性化・森林資源の有効活用および世界の森林保護・環境保護”であり、その方向性は変わりません。全国に散らばるこの多くの団体は、組織運営のあり方などに共通な悩みを抱えています。また市民への啓発活動や、行政への働きかけなど、複数の団体が集まって初めて大きな成果を得られる場合もあります。しかしながら、現時点ではこれらの団体間の、情報共有が出来ていない状況にあります。
そこで昨年、大分県日田地区で活動しているＮＰＯ日本の杉・桧を守る会が、各地のＮＧＯ・ＮＰＯとのネットワーク化を図るため、全国木偏のＮＧＯ・ＮＰＯサミット（以下、木偏のサミット）を開催しました。昨年は、ネットワークの必要性を相互に確認し、今年はネットワークの具体化に向けた方向性を議論する場となりました。

《サミットの流れ》

第2回・木偏のサミットは、海外の森林問題を扱っているNGOのFoE（Friend of Earth Japan）が幹事役となり、開催されました。会では、まず前大会の主催者からの挨拶が行われ、続いて四国の森づくりネットワーク会長の田岡秀昭氏より、基調講演がありました。四国の森づくりネットワークは、四国で活動する５３団体が集まってできたネットワーク組織で、木偏のサミットの目指す方向性のヒントが提示されました。
続いて行われたワークセッションでは、「木」をテーマにした団体を、３つに分類し、それぞれの分野の団体が、その活動内容や課題などを紹介しました。
午後からは、参加者を３グループにわけ、議論が行われました。

《ワークセッション》

①「森林整備ボランティア活動」
（信州フォレストワーク）

森林整備ボランティア活動を行うグループの代表として、信州フォレストワークから、活動内容やグループの抱える問題などが提示されました。会員の増加に伴って、会員に温度差があることや企画内容のマンネリ化などの課題が挙げられました。当日は、他にも森林整備ボランティア活動グループが参加しており、同様の問題を既に経験しているグループからはその解決案などのアドバイスがありました。

②「木材の地産地消活動」
（緑の列島ネットワーク・加藤副理事長）

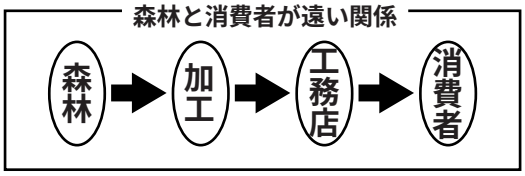
続いて、当ネットワークの副理事長である加藤長光氏が「地産地消」の考え方と、緑の列島ネットワークの位置づけについての発表を行いました。

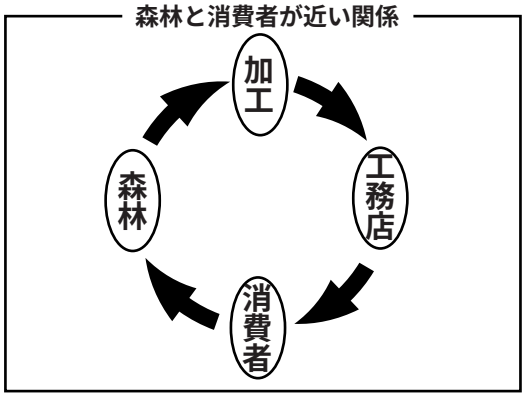
加藤長光氏

Ⅰ・地産地消
　林業と消費者（生活者）は平面に置くと一番遠い関係だが、輪にして考えると一番近い関係となる。緑の列島ネットワークは、こういった関係の地産地消を目指している。

Ⅱ・緑の列島ネットークの位置づけ
　緑の列島ネットワークは、事業体としてではなく、各地域グループや生活者の個々の活動を応援や支援する運動体である。緑の列島の会員である地域グループが、その地域にあった地産地消活動を行い、またその会員である各事業体が、その運動を活かすことで、地域に根ざした家づくりを目指したい。その動きが見えるように、そして活発なる様に支援していきたいと緑の列島ネットワークは考えている。

　また、木偏のサミットでは、山側と町側の使用する言語（専門用語やスタンス・考え方などを包括する）の違いによって相互の情報交流に支障があることが、大きな課題として認識されたが、このつなぎ役としての緑の列島ネットワークの役割も紹介されました。





③「海外・国内林業問題の政策提言活動」
（FoE Japan/日本の杉桧を守る会）

　最後のセッションでは、「海外・国内林業問題の政策提言活動」と題して、海外での違法伐採の現状や、国内林業の不振要因紹介が行われました。
　海外の問題と、一地域の問題を同時に論議することで、相互に与える影響による問題が浮き彫りにされ、活発な意見交換が行われました。

グループワークの様子

《グループワーク》

　午後からは、グループに分かれて個々の団体の課題、分野・地域を超える「木」をテーマとした団体がゆるやかにつながることによるメリットやその方法について議論されました。

　このような団体か連携することによって、地域や分野を超えた団体が情報交換を行うことができき、各団体が情報の新たな発信ルートを持つ事ができるようになり、また相互でノウハウを共有したくさんの事例から、より多くの問題解決の選択肢を持つ事が出来ることなどが期待できます。また、一団体では難しいイベントの開催も行うことができるのではないでしょうか。

　サミット後は、参加者の情報共有としてメーリングリストが開設され、"木"をテーマに様々な角度から、活発な意見交換がなされています。その様子については、今後のニューズレターでも紹介していきたいと思います。

　第3回サミットは、当ネットワーク加藤長光氏の受け入れで、今年10月に開催することが決定されました。

活動報告①

～西川林業地を訪ねて～

『近くの山の木で家をつくるスクール東京』のフィールドツアーとして、１月２８日（土）に西川林業地と知られる埼玉県・飯能市を訪ねました。近山スクールからは２０名が参加、また長谷川敬氏にも参加を頂き、建築家としての説明を随所にいただくことが出来ました。

当日は、１１月に行われた第３回の東京の近山スクールで、ご講義を頂いた井上淳治氏の所有する森林と木工体験工房の『木楽里』の見学に続いて、理事の大河原章吉氏の案内で、大河原木材・プレカット工場などを見学しました。

井上淳治さん

《西川林業地とは》

西川林業地は埼玉県の南西部に位置します。都心からも、１時間以内圏内にあり、その立地と、良質な木材で『西川材』として知られ、江戸の発展を支えました。

西川林業地は、気候条件や土壌が檜や杉の育成に適しています。『西川』の由来は、江戸時代に幕府の確立によって木材需要が格段に増えた頃、江戸より“西の側から筏（いかだ）によって運ばれた材”ということから『西川材』と呼ばれるようになったそうです。今では、マンションやビルが建つ飯能駅周辺も、４０年ほど前は、木材の鉄道輸送に有利な立地ということから、製材所が立ち並んでいたそうです。

《山を育てる仕事》

飯能駅から、バスで20分ほど走った所に井上さんの経営する森林があります。 井上さんは、先祖代々続く林業家で、現在約80haの森林を所有しています。周囲には人の手が入っていない森林もあったのですが、井上さんの所有する森に入ると、間伐や枝打ちといった管理が行き届いており、またまっすぐに育った木々に参加者からも感動の声が上がりました。

西川林業地では、高い山がほとんどなく小さな谷津が多いため、必然的に一つの谷から出る材が少なくなり、“効率の悪い立地”であると井上さんから説明がありました。そういった地形から、西川林業地では『立て木』という方法が行われています。これは、伐採時に１haあたり１０本程度を残し、１００年から２００年かけて大径木に育てる方法です。

このようにして大径木を注文に応じて伐採することによって、昔から持続可能な森林経営を行っていたそうです。現在でも、ヒノキの立て木の注文は多いものの、価格は最高値の時の3割から４割減となっているそうです。

《伝える仕事》

井上さんの森林では、大工職人の養成をおこなっている東京建築カレッジの学生さんの森林実習（下草刈りなど）の受け入れを行っています。将来、職人として木材と直接関わる人に、森林の大切さやその育成方法を、体験を通して知ってもらうことが非常に重要であると井上さんは語ります。また、彼らの木に対する強い知識欲には、いつも感心させられるそうです。

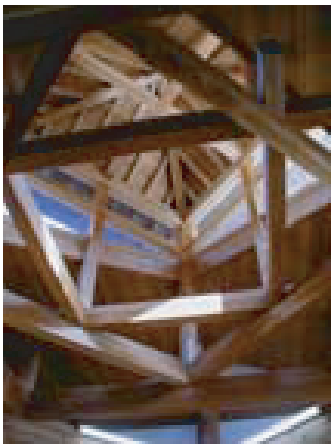
井上さんは、森林経営には一般の人たちとの交流や、情報提供を欠かすことが出来ないと考えています。

例えば、世間一般に、広葉樹林は保水力が高く、針葉樹林は保水力が弱いというイメージがありますが、手入れさえしっかりしてあれば、広葉樹林と人工樹林との保水力の差は、ほとんどないということは、メディアを通しては伝わってきません。したがって、“人工林”というカテゴリーに、全てが入れられ、管理の行き届いた森林にさえ悪いイメージが浸透してしまっていることなど、 森林の現状や問題が、メディアを通して正しく消費者に伝わっていない事を、井上さんは危惧しています。正確な情報が伝えられていない現状は、井上さんを始めとした林業家にとって常に悩みの種となっているのです。

熱心に聞き入る参加者たち

《体験を通して伝える。－木楽里－》

消費者へ“伝える”ことを大切にしている井上さんは、森林経営の傍ら木工体験工房の『木楽里』（きらり）を経営しています。



木楽里の内観

林業は、植林をした木が伐採され収益を得るまで、50年以上の月日を要する非常にスパンの長い産業です。

そのため、林家では昔から養蚕や薪炭などを兼業することで、定期的な収益を得ていました。井上さんのご実家も、このようにして養蚕などを営んでいたそうです。戦後の高度成長期には、薪炭や養蚕も廃れていきますが、同時に戦後の木材需要拡大もあり、その時代には林業だけで生業として成り立つことができたといいます。 しかし、木材価格が下落した現代において、林業のほかに収入を生み出すことが必要だと考えた井上さんは、常に感じていた消費者に直接伝える仕事を形にしたいという想いから、8年前に木工体験工房の『木楽里』を始めました。

『木楽里』では、西川材を存分に使い、ニーズに合わせて、デザインから、材料選び、加工までをエンドユーザーの手で行うことが出来ます。工房も、西川材をふんだんに使用しており、木のやさしい香りとぬくもりに包まれて、創作意欲の湧く空間となっています。

当初、井上さんは５０代、６０代の男性が多く集まるのではないかと予想をされていたそうですが、今ではお子さんの学習机を製作するなど若いご夫婦の姿も多くあるそうです。実際に、見学をさせていただいた当日も、4月の入学式にあわせて若いご夫婦が、学習机の製作を行っていました。

ここで使用する木材の値段設定は、市場の値段ではなく、山にお金が戻るように、1㎥18万円で値段の設定をしているそうです。この値段設定については、工房を利用する消費者にきちんとした説明がなされているそうです。

また木楽里では、森林体験ツアーや、林業体験の企画・運営をおこなっており、様々な角度から消費者へのアプローチを行っています。

木楽里・URL: *http://www.k-kirari.co.jp/*

《もっと森林が活用されるために》

日本の森林が、もっと広く活用されるためには、生産に関わる人の努力や、消費者への普及啓蒙の一方で、管理体制の改革が必要と井上さんは、語ります。

現在では、自分の山がどこにあるのかも分からない森林所有者が増えており、当然ながらこのような状態では管理など出来るはずもなく、このような状況を打開するためには土地所有権と、管理から生産や搬出といった一連の森林作業を手がける利用権の確立が必要だと、井上さんは語ります。

木楽里を訪ねる

《フィールドツアーの報告》

当日は、井上さんの所有する森林見学・工房見学をし、午後には大河原理事の案内による原木市場、製材所、プレカット工場、さらにはこれらの木材を使用した建築部材の見本やモデルハウスの見学を行いました。（誌面の都合上、午前中のプログラムのみ掲載させていただきました。）

山から消費者までの一連の流れに沿ったツアーの組み立てで、有意義なフィールドツアーになったと感じました。

１０時	飯能駅集合 井上さんの案内による森林見学
お昼	かたくりの里にて昼食
１時	木楽里にて見学 原木市場見学 大河原木材の見学 協同組合　フォレスト西川着 プレカット工場見学 モデルハウス兼事務所の見学

活動報告

■ 讃岐舎倶楽部の活動紹介

讃岐舎倶楽部は、香川県で積極的な活動を行っている地域グループです。（代表の菅徹夫さんのレポートはニューズレター9号をご覧ください。）昨年11月に行われた『大黒柱伐採ツアー』の報告を頂いていますのでご紹介します。

讃岐舎倶楽部では「近くの山の木で家をつくる運動」の一環として，昨年11月3日に『大黒柱伐採ツアー』を開催しました。今回は、35名の方にご参加を頂き、林業家豊田氏の手によって、実際に使われる檜の大黒柱を建て主さんの目の前で切り倒しました。

今回は3家族の大黒柱を切り倒すという、これまでで最大の伐採ツアーとなりました。90年生と70年生の桧です。豊田さんの桧はよく手入れされたグレードの高い（ほとんど無節に近い）上級桧です。7寸角程度の立派な大黒柱になる予定です。

実際にこのツアーを通して、目の前でご自宅の大黒柱を伐採したのはこれで8家族となりました。今後ももっともっと増やしていきたいと思います。

【参加者の声】（ＨＰより抜粋）

●家に使う柱の伐採に立ち会え、感激しました。何年経っても柱を見るたび今日のことを思い出すと思います。ありがとうございました。

●伐採現場を肌で感じて考えることがたくさんあった。木の歴史、人の歴史を考えた。昔の当たり前を現代の当たり前に戻さないと行けない。木と家主の出会い、結婚式のようで感動した。

写真は全て讃岐舎倶楽部の提供

■ 学会での発表

昨年9月、東京で開催されたサステイナブル建築世界大会（SB05）で、賛助会員である名古屋工業大学助手の田中稲子さんと、藤岡伸子理事が緑の列島ネットワークの東海地方での活動（主に近山スクール）について発表を行いました。田中さんよりその報告を頂いています。

サステイナブル建築世界会議は、持続可能な建築の実現や普及をめざす世界の研究者、実務家、企業、政府関係者、学生等が参加・運営し、最新の知見や試み、事例等に関して情報交換を行う国際会議です。SB05の委員長は慶応大学の村上周三教授が務められ、3日間で、79カ国と３地域、1700人名が参加するする非常に大きな学会となりました。基調講演では、安藤忠雄氏や持続可能都市として名高いブラジルのクリチバ市より、レルネル・ジャイメ氏などの講演がありました。

ポスター発表では、近山スクール名古屋の活動事例を通して、日本において持続可能な建築とは持続可能な森林経営と表裏一体のもので、地域の中で住まいづくりと森を繋げる社会システムの再構築が必要だということを主張しました。残念ながら、他のサステイナブル建築に関する発表の多くは、要素技術を付加し、環境ラベリング制度の中で優位性を主張するだけのものでした。この点に関しては、海外の研究者達からも批判の声があがっていました。風土性の中で、包括的な持続可能性を実現できるような建築のあり方を今一度見直し、実践例を増やすことでその価値を示していく必要があると感じました。

近山スクールの活動については、国内の方が特に興味を持って質問され、運営組織の維持の仕方や活動方針について、課題も含めて意見交換することができました。大手ゼネコンの方からは、持続可能と分かっていても大きな組織では木造に手を出しづらいというご意見もありました。

■ 森林認証・地域材認証と森林管理・木材利用に関するワークショップ開催のお知らせ

近年広がりつつある森林認証制度。この制度をどのように活かすことが、国内林業の活性化、地域材活用の推進へとつながるのかについてのワークショップが、各分野で活躍する方を招いて開かれます。このワークショップは、緑の列島ネットワークの後援で、理事長の大江氏も座談会に出席します。（以下、開催主催者より）

【ワークショップの趣旨】

2000年以降、FSC、PEFCなどグローバルスタンダードの森林認証を取得する森林所有・経営者が日本でも増えてきています。2003年には日本独自の森林認証制度であるSGECが創設されました。

一方、地産地消、産直住宅、ウッドマイレージなどの運動を契機として県産材認証、地域・流域材認証を創設する動きも最近加速しています。多くの森林所有者が森林管理に無関心で、放置林が増えつつある現状の打開に向けて、森林認証や地域材認証への期待が高まってきています。

このような期待に応えるためには、理念の構築のみならず、その実践に向けた先進的な行政・所有者・事業者・市民・研究者・ボランティア等の協働が必要となります。

本ワークショップは、このような協働が今まさに行われようとしている地域に関係者が集い、意見交換することにより、既に整理された理念を共有すると同時に、今後どのように実践的取組みを進めていけばよいのかを議論することを目的として開催します。

【ワークショップの概要】

日時：　２００６年4月２１日（金）　１３：００～１７：００
（引き続き、１７：３０～　懇親会、翌２２日９：００～　演習林見学会を開催）

会場：　尾張瀬戸駅前　パルティせと　４階　大会議室

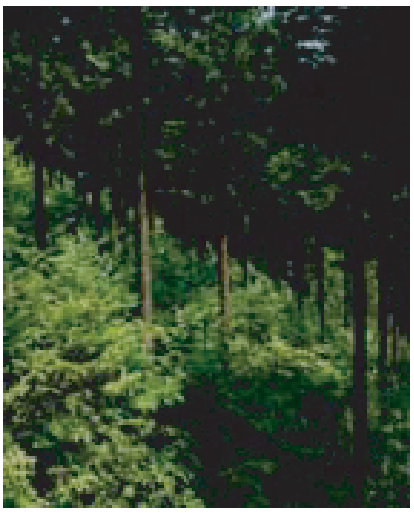
【ワークショップの内容】

司会：蔵治光一郎　（東大・愛知演習林　講師）

講演：白石　則彦教授（東大・農学生命科学研究科森林科学専攻）
「森林認証を通した地域森林管理の活性化試案」

地域の林業振興という川上側の期待と，地元材を安定して供給して欲しい川下業界の期待，さらに流域の森林の公益的機能を確保して欲しいという市民の期待，これらを森林認証を通じて高次元に調和させるための地域森林管理の枠組みについての講演です。

座談会：『今、なぜ認証林からの材か』
小原　公輝（大阪・輝建設　代表）
速水　亨　（三重・速水林業　社長）
岡橋　清元　吉野・清光林業　社長）
大江　忍（緑の列島ネットワーク・あいちの木で家をつくる会）
大浦　由美（名古屋大・大学院生命農学研究科　講師）



地域からの話題提供：原田　敏之
（NPO法人・穂の国森づくりの会　事務局長）
「ローカル版　手づくり認証システムづくりの運動」
愛知県豊川流域における「東三河環境認証材認証制度」について

【申込み方法】

参加希望の方は、緑の列島ネットワーク事務局までお問い合わせください。

■ 会員発のニュースを募集しています

見学会や勉強会、イベントなどこれからの活動予定をホームページで全国に発信しませんか。またそうした活動について、このニューズレターで詳しく報告していただくことが出来ます。
木守人、生活者、建築者それぞれの立場から多様なニュースが集まるように期待しています。ニュースをお持ちの方は、お気軽に事務局にお知らせください。メール、郵便、ファックスなどどのような方法でも結構です。
情報をお待ちしています。

■ 会員専用の掲示板を利用してください

緑の列島ネットワークのホームページに、会員専用の掲示板を作りました。しかしながらあまり利用されていません。会員の皆様の情報交換や、事務局に対するご意見など、活発な意見交換の場として、是非ご活用ください。
(http://www.green-arch.or.jp/treebbs2/0/index.html)

アクセスするには、ユーザー名とパスワードが必要になります。
ユーザー名:midori
パスワード:retou

編集後記

今回のニューズレターでは、少し誌面を頂戴して編集の江鳩より、いつもより多目の編集後記をお届けします。

●文字の大きさを変えました。
ニューズレターの文字が小さく、読みづらいというご意見を頂きましたので、vol.12より文字の大きさを変えました。皆さんの意見が、ニューズレターをつくります。ご意見お待ちしております。

●近山スクール東京の報告より
近山スクールのフィールドツアーにお邪魔して、近山スクール参加者のみなさんといろいろなお話をすることができた非常に良い機会となりました。緑の列島ネットワークに対する、厳しいご意見も直接頂戴することができ、私にとってまた新たな気持ちでニューズレター作成に取り組んで参りたいと思います。
当日お忙しい中、お時間を割いていただいた井上さんと大河原理事には、この場を借りましてお礼申し上げます。地域材普及促進のために、ご尽力されるお二人の姿が何よりも印象に残ったツアーとなりました。

●人工林の保水力について
特集でも報告しましたが、井上さんの危惧するとおり人工林イコール保水力がないというイメージが世間にはあるように思います。人工林といっても本当にその手入れは様々で、本当に真っ暗な森から今回ご紹介した井上さんの森林のような美しい森まで様々です。それを全く同じ”人工林”というカテゴリーで決め付けてしまうのは、やはり危険なのではないでしょうか
（写真は、関東地方のとある人工林の様子。表土が流れてしまい根が浮かび上がってる様子。）

●木偏サミット参加の感想
木偏サミットでは、たくさんの団体の方と情報交換をし、大変充実した時間を過ごすことができました。こういった場を持つことで、私たちの声がより大きくなり日本の林業の状態が改善されるような、政策提言にも結びついていくのではと、期待をしています。

平成18年4月1日発行

特定非営利活動法人　緑の列島ネットワーク事務局
理事長：大江忍

〒450-0003
名古屋市中村区名駅南1-3-15 サントピアビル3F

tel:052-566-0064　fax:052-566-0074
E-mail:jimukyoku@green-arch.or.jp
WEB:http://www.green-arch.or.jp

編集主幹:江鳩景子